

2008年6月5日

宮澤 信雄 様

黒田 敏正

日本評論社 第三編集部長

TEL:03-3987-8598

FAX:03-3987-8593

tkuroda@nippyo.co.jp

拝 復

5月6日付の「編集者への手紙2 再び『水俣病の科学』の非科学性について」と題するお手紙をいただきました。この間、入稿がつづきましたため、ご返事が遅れ、失礼いたしました。

今回のお手紙を拝読いたしました。先のご返事で申し上げました点に変更の必要はないことを再確認いたしました。

若干の説明を別紙にいたしましたので、ご高覧いただけますと幸いに存じます。

敬 具

『水俣病の科学』の科学性 2

致命的欠陥を裏付ける資料も存立を揺るがす事実もないことの再確認

宮澤様は2月25日付のお手紙と文書で、『水俣病の科学』に、科学書としては致命的な欠陥があることを裏付ける資料が見つかった」として「しかるべき措置」を求められました。

くりかえしになりますが、宮澤様が、「最近になって、『科学書』としての同書の存立を揺るがすと思われる事実があらためて判明」とされたのは、次の2点でした。

第一に、本書が八丈島沖と湯ノ児のデータをすり替えて「1959年頃の水俣湾海水中のメチル水銀量を10ng/lと推定」している。

第二に、本書150頁（増補版。旧版は146頁。以下同じ）注24の文献から引用されている、1987年に測定された海水中のメチル水銀量には水俣湾のデータがないが、宮澤様が元の文献と推測される英文文献には0.582 ng/lと明記されており、それにもとづけば、本書の算出法によっても水俣湾のメチル水銀濃度は70 ng/lにはなるから、10 ng/lとした本書の推定は完全に誤りである。

これに対し、私は先のご返事で、第一にデータのすり替えなどはなく、第二に注24の文献にあたっただけであればわかるようにデータ隠しなどもなく、いずれも宮澤様の誤読・誤解にもとづくもので、本書が「科学書としては致命的な欠陥があることを裏付ける資料」『科学書』としての同書の存立を揺るがすと思われる事実」はないこと、したがって「しかるべき措置」をとる考えもないことをお伝えいたしました。

先のお手紙と文書では、その冒頭に相当の意気込みでおたずねになりました上記2点に関する記述が、今回の「手紙2」では5頁になるまで登場してこないのは不思議な感じがいたしますが、以下に、若干の説明を付け加えます。

まず、湯ノ児のデータに関する誤読・誤解についてですが、本書の記述があいまいで、「誤読あるいは誤解に導くように書かれている」とし、誤読・誤解したとしても、「けっして恥ずかしいとは思いません。」と言われ、先を読み進むと「誤読でも誤解でもないことが明らかになるのですから。」とされています。

誤読・誤解されるように書かれているとしたら、編集者としての私の責任だといってよいでしょう。ただ、一般読者ならいざしらず、先の返事でもご説明しましたように、「水俣

病事件研究者」である宮澤様には、誤読していただきたくなくったと思います。

さて、宮澤様は「誤読でも誤解でもないことが明らかになる」として、179頁（175頁）の注47に言及されて、注47は注24の文献を指示しているのに、10ng/lは「特別な意味を持った数値」にちがいないとされています。たいへん申し訳ないのですが、ここに注を入れたのは編集上のミスでしたので、注そのものを削除させていただきます。ここでは単に仮定しているだけですから、必要のないところに注を入れたために誤読を誘ったことにつきまして、編集者としておわび申し上げます。

したがって、本書が同じ頁で、「当時の水俣湾のカタクチイワシの汚染状況と一致しています」としておられますのは、カタクチイワシのメチル水銀濃度のことで、第10節「表層魚のメチル水銀汚染」の175頁（171頁）の猫実験による発症蓄積量からの推定によるものです。湯ノ児の海水のメチル水銀濃度とはいっさい関係ありませんから、データのすり替えなどはありません。

次に、宮澤様は、2月25日付の文書で「『注24』について書いたことは間違いだったと率直に認めます。」とお書きになって、英文文献にのみもとづくという趣旨に文章を訂正されました。

注24の文献と英文文献とがどのような関係にあるかは、前回同様、私どもは存じません。英文文献に関連した宮澤様のおたずねですが、著者が‘Hirokatsu Akagi and Hajime Nishimura’と表記されているのはたしかです。西村肇先生におたずねしたところ、英文文献については関知されていないとのご返事でした。

したがって私どもにいえるのは、著者のお一人である西村先生が責任をもってデータを引用できる文献は注24に示した文献だけであり、データ隠しなどはいっさいないことだけです。

なお、誤植の訂正が一つあります。注24に刊行年次が「1987年」とあるのは、正しくは「1988年（春季）」でした。まことに申し訳ありません。重ねておわび申し上げます。

上記の説明で私どもは十分と考えますが、それでも宮澤様は0.582ng/lにこだわられると思いますので、一つだけ説明を付け加えておきます。

私どもでは英文文献の全文を入手しておりませんので、掲載されております0.582ng/lというデータがいつ計測されたかは不明ですが、いま仮に1987年といたしましょう。

宮澤様もご存知のように、1968年5月にはチッソのアセトアルデヒド工場の運転が停止されました（本書の図1-8）から、水俣湾へのメチル水銀排出は完全になりました。したがって、1987年に計測された0.582ng/lは、**汚染底泥に起因する**海水のメチル水銀値を示します。

汚染のはげしかった1957～58年当時と、汚泥しゅんせつ除去工事がはじまった1977年

とで、水俣湾底泥の水銀汚染状況に大きな変化はありませんから、この数字から推定できるのは、1957～58年当時の**汚染底泥に起因する**水俣湾の海水のメチル水銀濃度は0.6ng/l程度だったろう、ということだけです。ちなみにこの数値は、179頁(175頁)で推定した、当時の水俣湾のメチル水銀濃度10ng/lの6%程度にすぎません。

このように、この0.582ng/lという測定値からは、当時の**アセトアルデヒド工場排水に起因する**水俣湾のメチル水銀濃度を推定することはできませんので、宮澤様が、少なくとも70ng/lになるはずだといわれるのも、完全な誤解です。

ホームページへの掲載について

さて、先のご返事で、私が、宮澤様からいただきましたお手紙と文書のすべてと私の返信を小社のホームページに掲載させていただきたい旨のお願いをいたしましたところ、宮澤様は公表する場合には条件があるとされて、次の2点をお申し出になりました。

- ① すべてをそのまま「編集者への手紙」として掲載すること。
- ② ホームページでの公表が宮澤様の本意でないこと、したがって公表に対する反応ないし反響については私と小社が責任を負うこと。

はじめにいただきましたお手紙と文書は、前者の宛先が「日本評論社『水俣病の科学』編集者殿」となっており、後者に付けられた表題が「日本評論社へ『水俣病の科学』についての意見」となっておりました。

宮澤様は今回のお手紙の「追伸」で、「前便もこれも、編集者…への私信として書きました。」と書かれています。はじめのお手紙と文書が同時に、毎日出版文化賞を主催している毎日新聞社にも送られていること、お手紙で編集担当者あるいは学術書の出版社としての「しかるべき措置」を求められていること、文書が小社宛となっていることから、これらのお手紙と文書が限りなく公開質問状に近いものと私どもは受け取り、そのようにご返事してまいりました。

したがって読者に本書についての理解を深めていただくよい機会と考え、すべてのやりとりを小社ホームページに掲載させていただきたいとお願いしただけです。しかし、「本意ではない」とおっしゃることを無理矢理行なう出版社はないと思いますし、もちろん私どももそうするわけにはいきません。まことに残念ながら、宮澤様のお手紙と文書の掲載は断念し、私どもからの返信のみを掲載させていただきます。

科学的論争の作法

私どもは本書の刊行について出版社としての責任を負っておりますが、立ち入った内容の疑義につきましては、前回も申し上げましたように、著者との論争の結果を受けて、ど

のように対応するかを判断させていただきます。私どもは、今後ともこの立場で対処したいと考えております。したがって、宮澤様の今回のお手紙にあります個々の論点について、私がこれ以上触れることは差し控えさせていただきます。

今回のお手紙に、「いずれ機会があれば、論文にまとめるか拙著の中で触れるかするつもり」、「いずれ何かの形で公表するつもり」とありますので、宮澤様のお考えに対する本書の著者の詳細な意見もまた公表される機会があると思われまます。私どもは期待しつつ、その機会を待ちたいと思います。

なお、先のご返事で、私は「科学的で実りある論争」の進行に期待いたしました。前回の文書もそうでしたが、今回のお手紙を拝見しましても、海水中のメチル水銀の挙動や生態系汚染のメカニズムについてのお考えが、実測値や実験値にもとづいて述べられるのではなく、「～ではないか」「～と考えられる」と申されても、お答えのしようがありません。「編集者への手紙」ではなく、著者を相手とした場合、これでは科学的な論争の体をなしていませんので、宮澤様を相手に著者が科学的な論争をするのは至難のわざだと思ふようになりました。

また、宮澤様はしきりに、「一回限りのデータ」「一回こっきりのデータ」「一回だけの調査データ」では常態が判断できないと述べられています。そうでないデータがあれば、示していただければ済む問題です。これでは、水俣の生態系汚染の研究はできないとおっしゃっているに等しいではありませんか。

宮澤様は、『水俣病の科学』のどこでだったか、ただ一匹の死んだタチウオの水銀量から、タチウオの致死量は7 ppmだと決めているのに驚かされました」と述べておられます。「どこでだったか」などとは宮澤様らしからぬ言い方ですが、これは本書の164頁(160頁)にある「タチウオが一番低くて3～7 ppm」を指しておられると思います。この記述は次頁の表2-7に拠ったものですが、同表には6例のタチウオが挙げられており、最小値をカットして3～7 ppmとしたものです。「ただ一匹の死んだタチウオ」などとは、どこから思いつかれたのでしょうか。宮澤様の「驚き」には驚くばかりです。

さらに、宮澤様は「排水は水俣湾の表層だけを流れた…というのは『水俣病の科学』全体の存立にかかわる屋台骨の所説」と決めつけておられますが、これも完全な誤読・誤解による思いこみにすぎません。

序章でも述べていますように、本書は「メチル水銀の生成機構を解明するとともに、二つの謎(なぜ1954年に至って、なぜ水俣で——引用者注)を解き、チッソ水俣工場からのメチル水銀排出量を操業以来の過去にさかのぼって正確に推定することに成功)しました。これが本書の成果であり、核心なのです。

そのことは、本書を最後までお読みいただければどなたにもわかるはずなのですが、本

書を熟読玩味されているはずの宮澤様がなぜおわかりにならないのか、まことに理解に苦しみます。

いずれにいたしましても、本書の構成に関する完全な誤解に拠って立つ方との意見交換には困難なものがあると痛感いたしております。